

公開資料

戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）

「持続可能な多世代共創社会のデザイン」
研究開発領域

平成27年度採択 プロジェクト企画調査
終了報告書

「多世代で共に創る学習プログラム開発の検討」

調査期間 平成27年11月～平成28年3月

研究代表者氏名 森玲奈

所属・役職 帝京大学高等教育開発センター講師

目次

1. 企画調査の構想	2
1-1. 解決すべき都市・地域の具体的な問題とその原因、ボトルネック	2
1-2. 本提案における持続可能な都市・地域のビジョン	2
2. 企画調査の目標	3
3. 企画調査の実施内容及び成果	3
3-1. 企画調査の方針	3
3-2. マネジメントグループ	4
3-3. 対話グループ	10
3-4. 健康情報グループ	13
3-5. 芸術文化グループ	16
3-6. すまい方グループ	20
3-7. 次年度募集提案への示唆と構想	22
3-8. 主なミーティング等の開催状況	23
4. 企画調査の実施体制	28
4-1. グループ構成	28
4-2. 企画調査実施者一覧	29
5. 成果の発信等	31

1. 企画調査の構想

1-1. 解決すべき都市・地域の具体的な問題とその原因、ボトルネック

本企画調査が対象とする地域は百草団地（図1・図2）である。百草団地は1970年に完成し、まもなく完成から50年を迎えるが、最寄りの高幡不動駅から徒歩25分を要する高台の上に位置する。百草団地を含む日野市百草の高齢化率は27.8%（国勢調査2010年）で、同市平均の20.7%と比較しても高い。高齢化が進むものの、UR都市機構が子連れ世帯に賃料割引する支援をしており、若年世帯の移住が積極的に促されている。しかしながら、百草団地には、多世代型共創社会の基盤となる世代間交流が無いという問題がある。原因として (1) 世代によって生活圏の範囲に差があり日常的な世代間交流が乏しいこと、(2) 積極的に世代間交流を行うメリットが無いこと、が考えられる。ボトルネックは、百草団地が日野市・多摩市の両市に跨がり、行政区分が分断されている地域であることである。そのため、行政による施策で問題解消しにくいと考えられる。



図.1 百草団地と近隣の教育機関

1-2. 本企画調査における持続可能な都市・地域のビジョン

本企画調査では、高齢化が進む都市近郊において多世代を巻き込む仕掛けを考案し、世代を超えて共に学びながら年をとっていく、学びにあふれた社会、すなわち「ラーニングフルエイジング」な地域づくりを通じ、持続可能な地域づくりの実現を目指す。世代間相互学習は、現在活性していないが、エイジングによる世代交代していくことを考えた場合、単なる出会いの場、交流では弱い。世代を越え相互にメリットのある学習の枠組みを作って

おくことで、交流の無かった世代に接点を創り、相互対話を促す。ラーニングフルエイジングとは、言い換えれば揺りかごから墓場まで学び続けるというコンセプトである。死ぬまで学ぶということは、常に現状を内省し挑み変革する姿勢でもある。このような市民を育てることが、持続可能な地域づくりにとって重要な力になると考える。世代間交流が乏しかったこの地域では、持続可能な地域づくりに向けて、まず、相互を深く知ろうとする姿勢を醸成する必要がある。次に、共通の関心や異なった視点について、体験の共有と深い対話を通じて整理すべきである。その上で、市民自らがその地域らしさを発見し、新しい活動を共創していく力を持つことこそ、地域の持続可能性向上につながるだろう。

2. 企画調査の目標

本プロジェクト企画調査のリサーチクエスチョンは下記のようなものである。

- Q 1.都市郊外での多世代共創は、どのようにして実現できるか？
- Q 2.都市郊外において、どのような多世代共創型学習プログラムがデザインできるか？
- Q 3.都市郊外では、どのようにして多世代共創型学習プログラムの運営を持続可能にできるか？

これらに対し、本プロジェクト企画調査における達成目標は下記のとおりである。

- (1) 類似の取り組み事例（各大学のアウトリーチ活動を含む）との違いを明確にする。
- (2) 市民との対話を通じ解決する課題の定義および明示化するとともに、学習ニーズを明示化する。
- (3) 多世代共創に向け、特に若者の参加やインセンティブについて検討する
- (4) 学習というアプローチに何ができて何ができないのか、可能性と限界を検討する。その上で、学習にとどまらない地域デザインへの展開について検討する。
- (5) 地域実装や他領域への展開といった視点をより明確にする。
- (6) 以上を踏まえ、本提案のロジックモデルを見直し、次年度の募集提案の構想を具体化する（目標、ビジョン、移行プロセス、実行項目、実施体制等）。

3. 企画調査の実施内容及び成果

3-1. 企画調査の方針

本プロジェクト企画調査では、①都市郊外での多世代共創はどのようにして実現できるか、②都市郊外においてどのような多世代共創型学習プログラムがデザインできるか、③都市郊外ではどのようにして多世代共創型学習プログラムの運営を持続可能にできるか、という3つのリサーチクエスチョンに対して、マネジメントグループ、対話グループ、健康

情報グループ、文化芸術グループ、すまい方グループという5つのグループを構成し探求することとした。

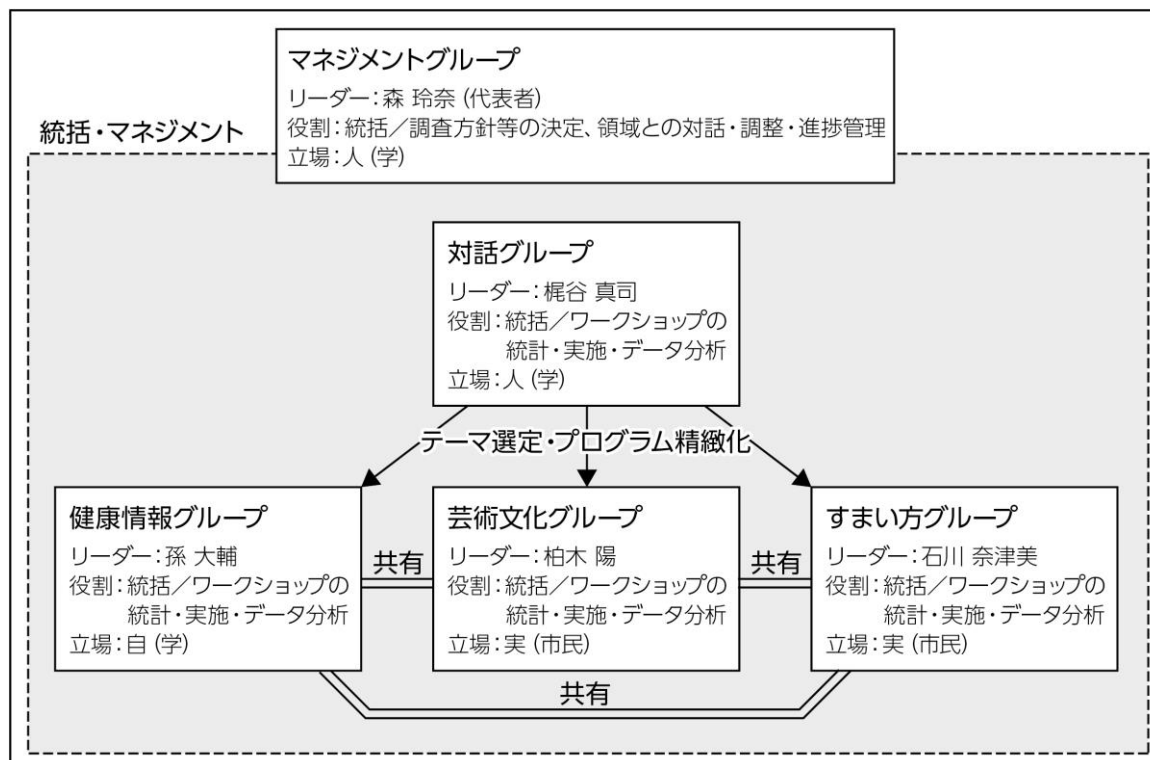


図. 2 多世代共創型学習プログラムの運営体制

マネジメントグループでは、類似の取り組み事例（各大学のアウトリーチ活動を含む）を調査し、大学教育との連携の中で若者の参加やインセンティブについて検討した。対話グループでは、市民との対話を通じ解決する課題の定義および明示化するとともに、学習ニーズの明示化に取り組んだ。

健康情報グループ・芸術文化グループ・すまい方グループは、仮想的に設定した超高齢社会における3つの学習課題（健康情報・芸術文化・すまい方）に対し、学習というアプローチに何ができて何ができないのか、可能性と限界を検討し、その上で、学習に留まらない今後の展開についても考察した。

その上で、マネジメントグループにおいて、上記の成果の共有と地域実装や他領域への展開といった視点をより明確にするためのディスカッションを行った。

3-2. マネジメントグループ

【1】マネジメントグループの意義・概要

本企画調査は社会における困難な課題を解決するためのアクション・リサーチである。目的意識やビジョンを企画調査メンバー、地域のステイクホルダー、学生の間で共有し、それぞれが実践の中で見つけた手がかりを迅速に共有し議論できる環境をつくることが重要であった。そのため、各グループリーダーと事務局から構成されるマネジメントグループを作り、円滑な運営と意識醸成がなされるよう努めた。

【2】マネジメントグループの実施内容

(1) 類似の取組の事例調査

本企画調査の独自性は何かをより鮮明に打ち出すため、類似の取組として大学主催のアウトリーチについて整理した。具体的には、50のアウトリーチを選出し、類型化した上で、本実践との類似点・差異点について検討した。

(2) ブックカフェテラチ

百草ふれあいサロンに通う大学4年生が自主的に企画書を作成し立ち上げた実践である。マネジメントグループはこの企画が実現するよう、帝京大学教務グループ、帝京大学メディアライブラリー（MELIC）、帝京大学総合博物館、帝京大学広報グループに働きかけを行い、後方支援した。このイベントでは、毎月1回帝京大学の教員をゲストに招き、1冊の書籍の紹介を通じて対話を行った。参加対象は主に帝京大学生や百草団地住民（定員15名）とし、ゲストトーク30分と参加者同士の対話60分というプログラム構成で実践を重ねた。

①第1回ブックカフェテラチ「学生と街、縁結び。」

日時：2015年10月20日（火）16時30分～18時

場所：帝京大学 八王子キャンパス MELIC地下1階 メディアラウンジ

ゲスト：佐藤宏樹氏（帝京大学短期大学現代ビジネス学科 講師）

紹介本：山崎亮『コミュニティデザインの時代』（中央公論新社、2012）

②第2回ブックカフェテラチ「交流する異文化」

日時：2015年11月23日（月）16時30分～18時

場所：帝京大学 八王子キャンパス ソラティオスクエア3階 アカデミックラウンジ

ゲスト：長綱啓典氏（帝京大学総合教育センター 講師）

紹介本：酒井潔『ライブニッツ』（清水書院、2008）

③第3回ブックカフェテラチ「出世を誘う、江戸幕府」

日時：2015年12月14日（月）16時30分～18時

場所：帝京大学 八王子キャンパス ソラティオスクエア3階 アカデミックラウンジ

ゲスト：山本英貴氏（帝京大学総合教育センター 講師）

紹介本：山本英貴『旗本・御家人の就職事情』（吉川弘文館、2015）

④第4回ブックカフェテラチ「ものがたりと教訓」

日時：2016年1月25日（月）13時～14時30分

場所：帝京大学 八王子キャンパス MELIC地下1階 メディアラウンジ

ゲスト：上田仁志氏（帝京大学総合教育センター 准教授）

紹介本：中務哲郎訳『イソップ寓話集』（岩波書店、1999）

⑤第5回ブックカフェテラチ「まなびの進化と深化」

日時：2016年2月15日（月）13時～15時30分

場所：百草ふれあいサロン

ゲスト：大川内隆朗氏（帝京大学総合教育センター 講師）

紹介本：松下佳代『ディープ・アクティブラーニング』（勁草書房、2015）

⑥第6回ブックカフェテラチ「継ぐことで創る日本芸能」

日時：2016年3月10日（木）14時45分～16時15分

場所：帝京大学 八王子キャンパス ソラティオスクエア地下1階 総合博物館

ゲスト：細田明宏氏（帝京大学文学部日本文化学科 准教授）

：宮川直也氏（明星大学人文学部心理学科4年生 三味線奏者）

紹介本：杉山其日庵『浄瑠璃素人講釈』（岩波書店、2004）

(3) 帝京大学授業「教育学」との連携

生涯学習社会では、自らが自らの力で学びの場を構成できる人が必要とされている。帝京大学八王子キャンパスの選択科目「教育学Ⅱ」では、生涯学習社会で注目を集めている「インフォーマル学習（学校外学習）」について学ぶ概論的な授業の中で、多世代で学ぶための学習プログラム（ワークショップ）の企画・運営・評価を行うことを最終課題とした。全ての企画は学生の発案によるものである。

①ワークショップ「あの人へのプレゼント」

日時：2015年12月16日（水）15時～16時

企画運営者：大学生8名

参加者：高齢者9名、大学生3名、小学生6名

場所：百草ショッピングセンター2階集会場

「世代間の違い」について相互が理解を深めることを目的とし、大学生と高齢者でチームを組み「みんなが知っている物語のキャラクターにどんなクリスマスプレゼントをあげたら

喜ぶのか？」を考え、クリスマスプレゼントを自分たちで粘土や折り紙で形にしたり、画用紙に絵を描いたりして表現する活動を行った。

②ワークショップ「Sweet Christmas：ツリーの前でお茶会を」

日時：2015年12月16日（水）15時～16時

企画運営者：大学生9名

参加者：高齢者13名、大学生3名

場所：百草団地ふれあいサロン

普段、思っているけれど口に出したり、書いたりしない願い事を紙に書き、自分の願い事と見つめ合って見ることで、みんなで願いを共有し、性別や世代による価値観の違いを知る活動を行った。

③ワークショップ「あなたの世界、わたしの世界：あなたに見えている世界を教えて」

日時：2016年1月5日（水）15時～16時

企画運営者：大学生6名

参加者：社会人1名、大学生16名

場所：帝京大学総合博物館

価値観の相違に気づくことを目的とし、帝京大学総合博物館の展示を学芸員と共に鑑賞した後、参加者各々、気に入った作品を1つ選び、そこから受けるイメージを絵や立体で表現し、グループ内で発表する活動を行った。

(4) 「<ラーニングフルエイジング>スライド展」の開催

これまで帝京大学や百草団地で行ってきた教育活動の記録写真をスライドにし、2016年1月5日～2016年1月15日に、帝京大学総合博物館にてスライド展を行った。この期間の来場者は807人であったことから、展示による広報効果は大きなものだったと言えるだろう。



図.3 <ラーニングフルエイジング>スライド展 (ポスター)



図.4 <ラーニングフルエイジング>スライド展 (展示風景)

(5)インターネットを使ったコミュニティ形成

グループ内外に活動を共有するため、インターネットを活用した。具体的には「<ラーニングフルエイジング>プロジェクト：超高齢社会における学びの可能性」のホームページ (<http://learningful-ageing.jp/>)、Facebookページ「ラーニングフルエイジング：超高齢社会における学びの可能性」 (<https://www.facebook.com/learningful.aging/>) を活用し、広報拡散には帝京大学八王子キャンパスTwitterおよびFacebookの協力も得た。インターネットを使う際、記録写真やチラシの画像を効果的に用いるよう工夫した。

【3】マネジメントグループの成果

(1)他のアウトリーチとの差別化・特徴

大学が地域に向かっていくアウトリーチは、大きく5つ(①奉仕活動、②居場所デザイン、③特産品開発・販売、④生涯学習支援、⑤イベント実施)に分類することができた。この中で、生涯教育や居場所デザインは本企画調査の参考になる部分が多いと考えられる。しかしながら、本研究テーマは、市民・大学生が自らの学習課題を発見し学習プログラムを企画・運営できるようになることを目標とした人材育成型アウトリーチであり、他の事例とは異なることが明らかになった。

(2)大学生の主体的参画と学生視点

まず、主体的に企画したい学生やそれを支援したい学生が現れたことは評価すべき現象と考える。その上で、このような若者の参加を増やしていくための方略として、参画した学生自身が提案したのは、大学のサークルや部活動に所属する学生と連携である。大学生がメンバーに入ったことで、大学生ならではの視点が提供される。大学生を評価し、役割を付与することで若者は責任感を持ち、主体的に行動する。この半期の企画調査の間に、教員が想定するより遥かに変容した大学生も多くいた。今後も、大学教育と連携させながら、若者の意見を積極的に取り入れ運営していきたい。

(3)大学生にとっての高齢者に対するイメージの変容

履修者は、9月の授業開始時点では高齢者と接触する機会も少なく、共に何ができそうかというイメージを持てずにいた。しかしながら、10月と11月に、百草ふれあいサロンで実施されたワークショップに参加し、対象となる高齢者のイメージをはっきりさせていき、フィールドの中で何が対象者にできそうかを考えるようになった。今後、彼らの意識や行動の変化を継続的に測る手段を検討したい。

(4)広報によるネットワーキングとICT活用の可能性

ワークショップの広報をチラシ・インターネット両面から行い、WEBへの実践報告の掲載を継続した結果、新しい層からの参加や、参加はできないけれど関心を持つ支援層が増えた。さらに博物館での展示以降は、帝京大学の教職員にも認知が高まり、博物館やメディアライブラリーセンター等、地域に開放している大学施設を中心に、次年度への協力が得やすい状況となった。積極的広報とICT活用により、コミュニティの重層化を進めることができ、活動継続におけるレジリエンスが高まることが期待される。

3-3. 対話グループ

【1】対話グループの意義・概要

本グループの中心となる「哲学対話」とは、「何を話してもいい」「相手を否定しない」「話したくなければ話さなくてもいい」など、特徴的なルールをもつ対話を通じ、共に問い考えることで、互いの視野を広げ、物事の理解を深めていくものである。哲学対話の場合、通常の話し合いと異なり、立場や職業、世代、年齢など参加者の属性が多様であればあるほど自ずと対話が反省的になり、互いに気づきの多い学びとなる。その結果、互いの違いを承認しつつ共感するということが可能になり、またとりわけ教育現場では、学ぶものの自発性を促すことに特徴がある。こうしたことから、個々の成員がより自発的、積極的にコミュニティに関わり、運営者が一人に偏るのではなく、より共同的に安定して持続するような仕組みを考えるうえで様々なヒントが得られると期待でき、本プロジェクトの課題にある「多世代」「学習」「持続性」といった点に貢献することを目指している。

【2】対話グループの実施内容

(1) 百草団地のふれあいサロンにおける哲学対話

下記の通り、哲学対話「みんなで哲学」を実践してきた（一連のつながりがあるので、企画調査以前のものも含めて記載する）。ファシリテーターは、イントロダクションを兼ねて梶谷真司が最初に行い、その後は、哲学対話を活動の中心にしているNPO法人「こども哲学おとな哲学アーダコダ」の井尻貴子がメインで入った。

2015年2月26日（木）14時～15時30分 参加者13名（男3女10；サロンメンバー11名）

進行役：梶谷真司 「人生の目標は何か」について対話

2015年3月26日（木）14時～15時30分 参加者9名（男1女8；サロンメンバー5名）

進行役：宮田舞 絵本「したきりすずめ」を読んで対話

2015年4月22日（水）14時～15時30分 参加者13（男6女7；サロンメンバー7人）

進行役：井尻貴子 「うま（波長）が合うってどういうこと？」について対話

2015年5月8日（金）14時～15時30分 参加人数9人（男5女4；サロンメンバー7人）

進行役：井尻貴子 「年配者の自慢話」について対話

2015年6月19日（金）14時～15時30分 9名（男4女5；サロンメンバー数不明）

進行役：井尻貴子 谷川俊太郎『かないくん』を読んで、「死」について対話

2015年7月3日（金）14時～15時30分 参加人数10人（男6女4；サロンメンバー7人）

進行役：井尻貴子 「商店街」について対話

2105年8月5日（水）14時～15時30分 参加人数13人（男6女7；サロンメンバー12人）

進行役：梶谷真司 絵葉書を1枚選んで、それに結びつけて思い出を語る

2015年10月21日（水）15時～16時

進行役：井尻貴子 「結婚」についての対話（大学生と高齢者）

2015年11月18日（水）15時～16時 参加人数18人（大学生と高齢者）

進行役：井尻貴子 「娯楽」について対話



図.5 「みんなで哲学」の様子

(2) 東京大学におけるワークショップ

2015年12月20日（日）14:00～17:00

P4Eワークショップ「ラーニングフルエイジング～超高齢社会における学びの可能性」

コーディネーター：梶谷真司（UTCP）

講師：森玲奈（帝京大学）「多世代共創に向けた対話実践の可能性」

ゲスト：井尻貴子（NPO法人こども哲学おとな哲学アーダコーダ）

百草団地ふれあいサロンのメンバー（丸山朋子、山口あつ子、福田照子）

「ネットワークで育ちあう！ ただいま団地は成長期」



図. 6 「P4Eワークショップ」における百草団地ふれあいサロンスタッフの登壇の様子

(3) 東京大学における講演会

3月20日（日） 13：00～15：00

プロジェクト「ラーニングフルエイジング～超高齢社会における学びの可能性」講演会
「地域社会における多世代交流と教育の役割」

ゲスト：田阪真之介（NPO法人グローバル・アカデミー代表理事・宮崎大学客員准教授）
「地域を起点に世界とつながる教育の活動報告」

宮寄麻由香（五ヶ瀬中等教育学校6年生）*高校3年生に相当
「私の地域での活動と今後の計画」

【3】対話グループの成果

まず、哲学対話についての成果は下記の4点である。

(1) コミュニティとの関連

哲学対話はお互いに率直に話をして傾聴し、互いの存在を認め合うため、コミュニティ作りにも大きく貢献する。他方百草団地ふれあいサロンは、すでにコミュニティとしてすでに7年以上運営されており、とてもまとまりがある。そのためコミュニティ作りを改めてする必要はさほどなかったが、哲学対話は安心して話せる場となっていた。また互いに違っていいんだということが自然に思えるようになったようで、いろいろな人がいるコミュニティとしての緩やかなまとまりを、以前より意識するようになった。

(2) 参加者の自発性

井尻の回では、その日に各自で問いを出してもらおう形で進めることが多かったが、何回かやっていると、事前に自分で問いを考えてきたり、対話後にさらに考えていることがあったりして、自発的に「哲学する」ことがメンバーに見られるようになった。また回を重ねるごとに次の対話を心待ちにするようになったり、当初は囲碁などをして参加しようとしていなかった男性が途中から参加したり、対話の参加者もその周りにいた人も、より自発的になったようだった。

(3) 多世代交流

ほとんどの回で、大学生が少なくとも一人、ときに10人前後参加していたが、とくにサロンの人たちは、対話中に学生たち、「若い人」の意見を聞きたがった。また学生たちも、高齢者の話を興味深く耳を傾けていた。そうしてお互いがお互いの立場を尊重し、双方にとって意義深い場になっていたことが分かった。また、対話の場で世代が異なる人たち（高齢者にとっての若い人、若い人にとっての高齢者）と話をすることで、日常生活でも世代の違う人のことが分かるようになったとのことだった。

(4) 互いの尊重

コミュニティボールという対話のためのツール（持っている人だけが使っていい毛糸のボール）を使っているため、誰がどれだけしゃべっているか視覚化され、一部の人に発言が集中しなくなる効果がある。どんな会合でも、一部の人が発言を独占し、他の人がただ黙って聞くだけになれば、参加者の多くが受け身になり、興味を失う。自分の話をきちんと聞いてもらえることは、どんな世代の人にとっても、自己肯定や相互承認につながり、互いの関係をより信頼でき、安心できるものにする。サロンでの対話でも、「また発言してすみません」「長くなってすみません」など、自分の発言を反省する言葉がしばしば聞かれ、よりお互いを尊重する話し合いに自然になっていることが分かる。

一方、12月のワークショップに関しては、ラーニングフルエイジングのプロジェクトを広く一般に知ってもらうために、メンバーの一人である梶谷真司がセンター長を務める東京大学駒場キャンパスの「共生のための国際哲学研究センター（UTCP）」のイベントとして開催した。百草団地ふれあいサロンの主要メンバー3人を招き、サロンのこれまでの活動を紹介し、プロジェクト代表の森玲奈のほうからの趣旨を説明があった。哲学対話でメインの進行役を務めた井尻貴子からコメントをもらった。来場者からの反応も良く、質疑応答では自分の住む自治会の運営についてのアドバイスも求められた。多くの高齢者のコミュニティで、人間関係作りやそのためのコミュニケーションが切実な問題であることが分かった。

3-4. 健康情報グループ

【1】健康情報グループの意義・概要

健康情報グループは、百草団地の住民およびそこに集うさまざまな世代の人々を対象にして、対話やワークショップなどの学習プログラムを通して、健康に関する知識と健康情報を活用する力（ヘルスリテラシー）を向上させることを目的とした。

健康や医療に関する情報は、市民の学習ニーズが高いながらも、主体的に情報を収集し活用する能力が養われにくく、受け身になりやすいという特徴を持つ。本プロジェクトにおいては、多世代が混じる形での、対面型の対話やワークショップによる学習プログラムを通して、どのような学習効果が得られるか、学習が促進されやすいフォーマットや条件は何か、などの観点から分析を行った。

【2】健康情報グループの実施内容

(1) 第1回百草すこやかカフェ「家庭医とかかりつけ医の効用」

日時：2015年10月16日（金）14時～15時30分

場所：百草団地 ふれあいサロン

対象：百草団地住民21名（男性5名、女性16名）

百草団地に集う市民と医療・健康に関する専門家が交流しながら、かかりつけ医の重要性や健康・医療とのつきあい方について考えることを通して学ぶ。

カフェ型コミュニケーション（ワールドカフェ）を行った。

(2) 第2回百草すこやかカフェ「くすりとの賢いつきあい方」

日時：2016年1月23日（土）15時～16時30分

場所：百草団地 ふれあいサロン

対象：百草団地住民19名（男性6名、女性13名）、一般参加者6名（男性2名、女性4名）

目的：百草団地に集う市民と医療・健康に関する専門家が交流しながら、ワークショップを通じて、薬や薬局の有効な活用、薬とのつきあい方について考えることを通して学ぶ
講演1「薬剤師が考える賢い患者になるためのヒント」（薬剤師・鈴木邦子）、講演2「プロ患者が伝授する医師・薬剤師とうまく関わるヒント」（患医ねっと株式会社・鈴木信行）を聞いて考えたことを漢字一文字で講演内容を表現し、互いの考えを共有した上でディスカッションした。

(3) 帝京大学教育学II

日時：2015年11月25日（水）14時45～16時15分（計1.5時間）

場所：帝京大学八王子キャンパス1131

対象：「教育学II」受講者（大学1年生～4年生）

講師：孫大輔（東京大学医学系研究科）

高齢者ではなく若年層に関心のある健康情報は何かを調べるため、授業日の1週間前に、受講生に対してどのようなテーマのワークショップを受けたいかアンケートをとった。候補として挙げたテーマは5つで、①美容・健康と学ぶことの関係（3票）、②メンタルヘルス（11票）、③運動と健康（6票）、④医療ビジネスと家庭医（0票）、⑤医療の歴史と最新医療技術（1票）、となった。その結果、メンタルヘルスに関するワークショップを行った。うつ病、不安障害、統合失調症に関して簡単なレクチャーをした後、ワールドカフェ形式で「心の健康を保つためには？」「困っている友人を支えるには？」というテーマで対話してもらった。ややセンシティブなテーマであったが、学生同士で活発に対話が行われていた。その背景としてワールドカフェ形式が、やや重いテーマでも気軽に話ができる雰囲気を醸成したこと、若者にも起きやすい問題としてテーマを自分事として捉えやすかったためかと考えられた。

(4) 第3回百草すこやかカフェ「ふれあい共想法体験ワークショップ」

日時：2016年3月2日（水）16時～18時

場所：百草団地 ふれあいサロン

対象：百草団地住民12名（男性3名、女性9名）、一般参加者3名（男性1名、女性2名）

「ふれあい共想法」の体験を通して、認知症を予防するために自分たちに出来ることを考え、主体的な態度を養ってもらうことを目的とし実施した。まず、「ふれあい共想法について」（千葉大学・大武美保子）を聞いた後、ふれあい共想法ワークショップ（テーマ「断捨離」）を体験した。

【3】健康情報グループの成果

第1回「家庭医とかかりつけ医の効用」では、対話の中で「病気と二人三脚で行きたい」「サロンに毎日来るのが楽しみ」「食事や趣味などで自分なりの健康法を」などの声が聞かれた。アンケートからは「大病をしても前向きに明るく過ごす大切さを学んだ」、「一人一人が自分の健康に関心を持つことが必要と感じた」、「大きな総合病院に行く前に地元にかかりつけ医を見つけることの大事さが良くわかった」などの気づきが述べられており、健康に対する主体的な意識づけに関して一定の効果があったと考えられた。

第2回「くすりとの賢いつきあい方」では、参加者が表現した漢字に「伝」「相」「親」などが見られ、ワークショップを通じて、当初は薬剤師と距離を感じていた方が「もっと薬剤師に健康のことを相談しよう」などとポジティブな変化が見られた。

第3回「ふれあい共想法ワークショップ」は、4人ずつグループになり、各自が事前に撮影した写真についてプレゼンし、その後コメントしあうという形式で進めた。時間制限があるためかえて会話が刺激され、多くの笑いも起きていた。「ふれあい共想法」は写真をめぐる会話することで、多様な世代や背景の参加者を、自然な形で対話させるためのツールとして有効と考えられた。

一連のワークショップを通じて参加者の満足度は高かった。第2回・第3回はテーマの選定に市民の声を取り入れたこともあり、積極的に参加し発言したり質問したりする姿勢が見られた。アンケート記述から見ても、健康に対する主体的な意識づけがある程度成功していると思われる。また、「百草すこやかサロン」がすでに住民の交流場所として活用されており、サロンの運営スタッフがファシリテーター役として機能したため、ワークショップが円滑に進行した。

一方、3回の実践を通じ、健康情報を扱った多世代での学びにおける課題が見えてきた。

(1)実践場所と対話の形式

グループワークを行う際、テーブルの大きさがまちまちであったことが、グループの対話活性度に影響したと考えられる。少人数すぎるグループと大人数すぎるグループの混在を避けるため、今後の活動を百草すこやかサロン以外の場所を利用することも検討したい。

(2)テーマ設定と若年層へのリーチ

一連のワークショップを通して、若年者や外部参加者（団地住民以外）は少ない人数のままであった。一方、「教育学II」の授業実践を通じ、大学生が健康情報に関心がないわけではないことは確かめることができた。今後は、高齢者と若年層が共に学びたい健康情報の学習課題は何なのか、テーマ設定をする上で十分に検討する必要がある。また、告知方法などの工夫を通して、いかに多世代にわたる多様な人を呼び込むかも課題である。

(3)地域の医療関係者・福祉関係者との連携

今年度は、他地域の医療関係者・実践者を招聘する形での実践を企画したが、今後、市民が主体的に学習プログラムを企画・運営できるようにするためには、地域の医療関係者・福祉関係者との協働が必須である。そのためには、今後、行政各所や医師会・薬剤師会等への説明も検討すべきだろう。

多世代が混じる地域コミュニティに対して、対話型アプローチやふれあい共想法ワークショップを通じた健康に対する主体的な意識づけやヘルスリテラシー向上は可能と考えられる。特に住民主体で形成されている交流場（コミュニティ）において、それを活用する形でワークショップを行うと有効と考えられる。しかしながら、多様な世代を巻き込む学習活動としてはまだ不十分な成果であり、今後、テーマの選定や他グループとの協働を含めた戦略的なアプローチを行い、多世代共創による学習プログラムの有効性を探ることが必要である。

3-5. 芸術文化グループ

【1】芸術文化グループの意義・概要

本グループでは芸術文化を中心にして人の集いを作っていくことを目指した。主に行ったのは演劇を中心とした活動である。なぜ演劇を選んだかと言えば、殆どの人が体験

したことのないことでありながらまったく新しいことでもないからである。加えて、お互いに評価も定まりづらく、なおかつ手がかりがないわけでもないので活動できなくなるということもない。人の助けを借りやすくなるので相互の交流を促しやすくなるのではないか。外側にある評価軸ではなく集まった人たちで評価を作っていくような活動になるのではないかと考え、このような活動にした。

演劇は身体を使って演技し言葉を使って会話をする活動である。そのため、実際に目の前でやってみせることでその会話には言葉だけでなく表情や姿勢など非言語的なやり取りもあるということに意識的になることが可能になる。また、会話の中で何が起きているのかを理解し、検証する事ができる。

演劇に限らず、芸術文化活動には自分の体験をほかの人に伝えていくために物語化するプロセスを体験していくことになる。様々な方法を使って自分のこと自分の体験したことを表にあらわすことで様々な思いを交わし楽しくやり取りをしていく助けになるのではないだろうか。活動の持続ということ考えた場合、一過性の参加ではなく継続性を持たせるためには、「楽しい」と感じられること、すなわち情動を揺さぶる体験が不可欠ではないだろうか。実生活にほとんど影響を持たない場の中でともに何かを作り良いやり取りを持つことが、実生活にも転移し良い影響をもたらすのではないかと考えている。

【2】芸術文化グループの活動報告

(1) 百草団地ふれあいサロンでの「はじめての演劇」

(一連のつながりがあるので、企画調査以前のものも含めて記載する)。

第1回 2015年7月11日(土) 15:00~16:30 28名(男8名、女20名)

進行役：NPO法人演劇百貨店 「団地をあるいて演劇をつくってみる」

第2回 2015年11月14日(土) 15:00~16:30 20名(男8名、女12名)

進行役：NPO法人演劇百貨店 「雨の日についての演劇をつくってみる」

第3回 2016年1月9日(土) 15:00~16:30 19名(男8名、女11名)

進行役：NPO法人演劇百貨店 「お正月についての記憶を演劇にしてみる」

(2) 帝京大学ライフロングアカデミー「ワークショップデザイン入門」

第1回 2015年11月21日(土) 10:00~12:00 10名(男4名、女6名)

第2回 2015年11月28日(土) 10:00~12:00 10名(男4名、女6名)

第3回 2015年12月5日(土) 10:00~12:00 10名(男4名、女6名)

進行役：森玲奈(帝京大学)、NPO法人演劇百貨店

(3) 帝京大学授業「大学概論II」補講「プレゼンのその前に...」

2016年1月14日（木） 13：30～15：30

進行役：森玲奈（帝京大学）、NPO法人演劇百貨店

(4) 百草団地ふれあいサロンでの「お話をつくるお茶の会」

2016年2月13日（土）15：00～16：30 15名（男3名、女12名）

進行役：NPO法人Collable

(5) 英国マンチェスター・カメラータのエducatorを迎えた意見交換会

2016年2月16日（火） 15：00～17：00 17名

講演：ニック・ポンシロ（マンチェスター・カメラータ）

進行役：ブリティッシュ・カウンシル

(6) 第13回ラーニングフルエイジング研究会「学びあふれる社会のために、芸術文化ができること」

2016年2月16日（火） 18：00～20：30 80名

講演：ニック・ポンシロ（マンチェスター・カメラータ）、岡田猛（東京大学大学院教育学研究科）、新藤浩伸（東京大学大学院教育学研究科）

進行役：森玲奈（帝京大学）

(7) 帝京大学での「セルフポートレートワークショップ」

2016年2月24日（水）14：00～17：00 12名

進行役：栗原論（写真家）、大西景子（Box&Needles）

【3】芸術文化グループの成果

成果として大きく3点挙げられる。

(1) 多世代の参加と体験の共有

百草団地のサロンでの「はじめての演劇」では、個人的な体験を話すこと、他の人の体験を聞くことを実践できた。その体験の中から演劇的な場面を作り出すことでお互いの経験の共有が生まれたのではないかと考えられる。また、お互いに見合うことでお互いの存在を認め合うことになったと思われる。演劇ワークショップには、他のグループに比べ、帝京大学の学生、明星大学の学生の自主的な参加が見られた。大学生にとっては、違う世代の考える事知っていることの違いなどを知ることが出来たようである。

芸術文化グループの中で最も遅い日程で行った「セルフポートレートワークショップ」では、小学生、大学生、社会人から高齢者まで幅広い年代が集まった。活動が周囲に認知されてきたということもさることながら、写真を撮るといふ活動そのものの面白さが多様

な世代にリーチできるポイントになっていると考えられる。活動の記録を残し展示や共有につなげるという意味でも、写真に関する実践が盛況であったことは興味深い。

(2)創発的コラボレーション

偶然の出来事として、演劇ワークショップに参加した大学生の中に津軽三味線を持って来ていた者があり、終了後に即興演奏するということがあった。このような偶然の背景には演劇活動で温まった空気感と信頼関係があり、ある種、必然とも考えられる。つまり、芸術文化活動の意義とは、ある一つの活動が多義的に機能し、何か別の時間や別の活動が生まれていくという、イノベーティブな可能性を持っているということである。これは今後継続していく上で、とても良い兆しである。

(3)主体的な提案と正統的周辺参加

実践が進むにつれ、百草団地ふれあいサロンのスタッフから「今度はこのような題材が良いのではないか」とか「このような流れが良いのではないか」といった発言が出てきた。このような発言は、自分たちが一参加者というポジションから活動全体を俯瞰し、自分たちが活動を左右する存在へと変わり始めた兆しと捉えることができよう。

他グループの実践の多くは、椅子に座って行っているがほとんどの場合最後には立ち上がっている事が多い。身体的なポジション移行の面から見ても、芸術文化グループの実践は、主体的に学ぶ姿勢をつくっていく上で貢献していると考えられる。

帝京大学内での実践においては、大学生が近くでありながらあまり関心を向けなかった近くの団地への興味を向ける契機となったと思われる。大学生にも一般社会人にも高齢者にも同じプロセスを行うことで共通の体験を持ってもらいお互いの交流への入り口として機能したのではないだろうか。実際、帝京大学での活動から百草団地ふれあいサロンでの活動に参加しに来た方も多く見られた。

また、今後の活動への示唆として以下のような点が得られた。

(3)「賑わい座」としてのアートスペースづくり

百草団地ふれあいサロンを中心として賑わいを生み出し注目を作るという意味で、今年度の企画調査は一定の成果を収めた。今後は、サロン以外の場所で行う活動から団地やサロンへの人の流れが作れると良い。その際、多くの大学生や若年層が百草団地の中で集まることができる場所があれば、参加が一過性ではなくなってくると思う。継続的参加を促すために演劇作品上演やアートスペースの運営などを行えると百草団地という場所に対するイメージが変わるのではないだろうか。何らかの作品を作るとか場所の運営などを行うことで大学生などの今までこの団地に関わりを持ってこなかった人たちに役割を生み出すことが出来るのではないかと思う。大学主催のアウトリーチ調査の結果や、アーティスト・イン・レジデンスの事例も参考にしながら、今後、どのような場作りを実現できるか検討していきたい。

(4)音楽活動・音楽教育の導入

演劇ワークショップ参加者による三味線演奏が行われた日、サロンの外を歩いている人が惹かれて中へ入ってくる事があった。音楽活動は誘引力を持つと思われるので、次年度は加えていけるよう準備を行っている。

今年度は、音楽関係者向けの意見交換会と一般向け研究会という形式で、英国のオーケストラ「マンチェスター・カメラータ」でカメラータ・イン・ザ・コミュニティ部門を率いているニック・ポンシロに講演をいただいた。マンチェスター・カメラータは、英国北西部の都市マンチェスターで活動する室内管弦楽団である。トップクラスの音楽家たちによるコンサート・パフォーマンスに加え、音楽を通じた次世代の育成やコラボレーション、自閉症児や認知症の人々の生活の質の向上を目的としたプログラムなど、音楽を用いてさまざまな方法でコミュニティの結び付きを深める活動を展開している。本企画調査の代表は2015年8月に英国に滞在しその実践を参与観察しており、百草団地での多世代共創にも英国音楽家との連携が大きな意義があるのではないかと考えている。意見交換会・研究会の前後、ニック・ポンシロに百草団地を視察してもらい、次年度、共同研究を進めるための具体的なディスカッションを行った。

3-6. すまい方グループ

【1】すまい方グループの意義・概要

すまい方グループは、今回の研究対象地区である百草団地の住民が、自らの住まいにより愛着を持ち、より豊かな住まい創りに貢献する事を目標とした。長年この場所に住む住民にとって日々暮らすまちや住居は当たり前風景であり、自らのすまい方を改めて考える機会はないのではないかと。従って、この目標を達成するためには、百草団地のまちや住居の魅力を再発見・再認識することが大切であると考えた。

再発見・再認識のため、世代・立場の異なる他者の視点：近辺の帝京大学の学生らを中心とした若者の視点と住民の視点が交流することを通じ、盲点だった百草団地の住まいの特徴や魅力を改めて実感し、自らのすまい方を見直すためのワークショップを企画・実施した。また、関わる若者にとっても、フィールドワークと住民との交流を通じ百草団地への興味やコミュニティの魅力に気づき足を運ぶようになれば、持続可能な地域の発展が望めるのではないかと考える。

【2】すまい方グループの実施内容

すまい方を主体的に考え学ぶことを目的としたワークショップを、3回実施した。

(1) 第1回「百草まち歩き探検」

日時：2015年10月21日（水）15時～16時

場所：百草団地ふれあいサロン

対象：大学生10名（男性8名、女性2名）

フィールドワークを通じて、百草団地の魅力を発見することを目的とし、まち歩きをした後、「お宝スポット」の共有を行った。

(2) 第2回「百草まち歩き探検」

日時：2015年11月18日（水）15時～16時

場所：百草団地ふれあいサロン

対象：大学生8名（女性8名）、オブザーバー2名

第1回目の実践を踏まえ、時間短縮と意見共有の視覚化・簡便化を狙い、フィールドワークの際、インスタントカメラ（チェキ）で撮影することに変更した。

(3) ワークショップ「みらいの住まい方を考える」

日時：2016年2月5日（月）13時30分～15時

場所：百草団地ふれあいサロン

対象：百草団地住民14名（男性2名、女性12名）、一般参加者6名（男性1名、女性5名）
若者と高齢者がこれからの百草団地のすまい方を共に考えることで、各自、より良いすまい方を見出せるようになることを目的とした。まず「百草団地の歴史」を学んだ後、「未来の間取りのアイデアを考えてみる」という課題に対し、条件を5つ（日本を体験できる家、一人暮らしの画家の部屋（アトリエ）、若者5人が同居できる家、本が500冊ある家）の中から一つ選び、百草団地の住居の平面図に家具や設備を記入し検討し発表する活動を行った。通常は前提であり動かしづらい「間取り」について考えることで「百草団地が潜在的に持つ魅力」を話し合った。

【3】すまい方グループの成果

(1) 大学生が思う百草団地の魅力

大学生向けに実施した2回のワークショップを通じて、彼らが思う百草団地の魅力として①文化的な要素（「保育園の壁一面に書かれた似顔絵」「ショッピングセンターのアンパンマンが描かれた壁画」「そば屋とそば屋のおばちゃん」等）、②物理的な要素(機能)：「公園の遊具」「歩道のベンチ」「バリアフリーの手すり」等）があることがわかった。

(2) 高齢者のすまいに対する考え

第3回目のワークショップでは、高齢者が若者との交流を通じて、自らのすまい方に対して、新たによりよく暮らすための視点・観点を持つことが垣間見られた。例えば、「現在あまりにも荷物が多いのでいかにして暮らすかを考えてみたい」や「住まいを選ぶときの日当たりの重要性（に気付いた）」等。また「部屋の使い勝手を考える事で、普段は言葉に出にくい不便な所や希望が出てくる所がおもしろい」という感想も見られた。

(3) 非住民の地域理解

近隣の大学生や一般参加者が、百草団地のまちの魅力や歴史を知ることによって、百草団地に

ついでに興味関心を持つようになった。「皆さん抽選で入居した思い出のあるまち、大切にしたいと思いました。」といった感想もあった。この実践の経験者は、ここで得た知識・視点を糧とし、後日、百草団地ふれあいサロンで実施するワークショップの企画運営を行った。

(4)「すまい方」に対する教育的アプローチの可能性と限界

今回の実践では、世代間共創ですまい方に関する新しい視点を獲得するという学習が見られた。しかしながら、住民と非住民が持っているレディネス・問題意識・関心の違いが、実践の参加の障壁となったり多世代交流を妨げたりしている可能性も示唆された。住民と非住民の間にある溝を埋めることは、「すまい方」という視点からは難しいと考えられる。非住民は「すまい方」と百草団地とがリンクしにくく、住民は「すまい方」について学習しても現実の生活を改善する上でできることが限られていると思いがちである。そのためどちらも「すまい方」学習にとりかかる動機が上がらないのではないかと推察される。

この点は、他グループとの連携により、段階を踏んだ住民の巻き込みを実施しなければ解決しにくい課題だと考えられる。

3-7. 次年度プロジェクト提案への示唆と構想

以上を踏まえ、次年度募集提案への検討を行った。

まず、短期的アウトカムとしては、百草団地住民と帝京大学大学生それぞれの中から、生涯学習プログラムを企画運営できる人材、すなわち「学習環境デザイナー」を育成したいと考えている。今後、学習環境デザイナーの育成に必要な課題として、①課題発見力、②企画デザイン力、③コミュニケーション力、④ICTリテラシー、⑤批判的思考力、があると考えられる。

地域および大学に育った学習環境デザイナーを核として、生涯学習プログラムを共創し、地域住民と大学とを繋ぎ相互理解を深めていければと考えている。長期的には、近隣の幼稚園・保育園・小学校・中学校・養護学校にもその環を拡げていきたい。

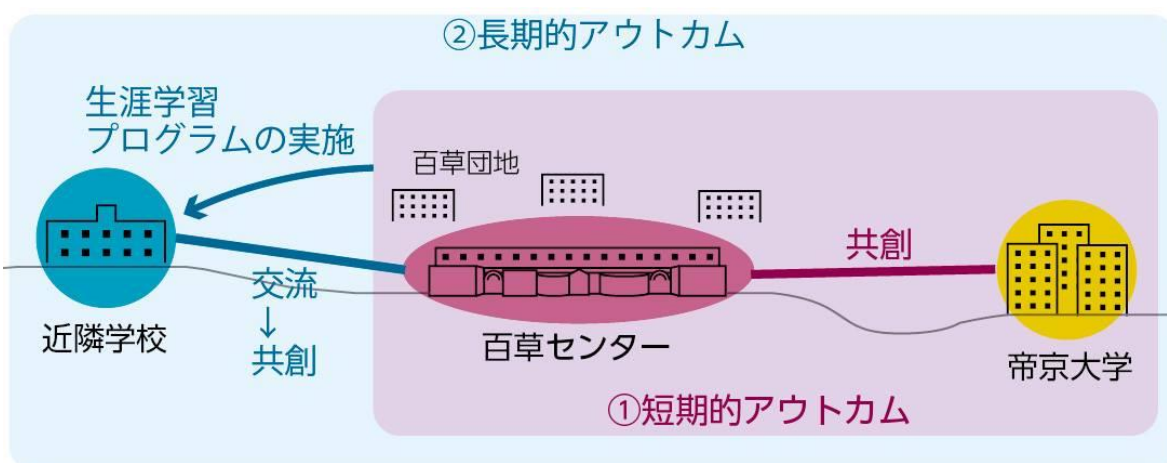


図.9 プロジェクトの展開イメージ

学習というアプローチの可能性は、主体的に学べる人が増えることで地域が活性化し持続可能な地域社会が実現すると考えられることである。一方で、今回の企画調査を踏まえ、教育的手法だけでは行動変容に繋がられない課題も散見された。今後、市民・大学生が自身の学びたい課題、学ぶべき課題を自ら選択し企画を立てていくことが望まれる。

本企画調査では学習プログラムとして対面型のワークショップのみを扱ってきたが、今後の持続可能性を考えた場合、非対面のオンライン学習プログラムのデザインも検討することで一層効果が高まると考えられる。オンライン学習は、高齢者層のICTリテラシー向上にも繋がるだろう。

そこで、次年度提案に向け、ロジックモデルを再検討した。

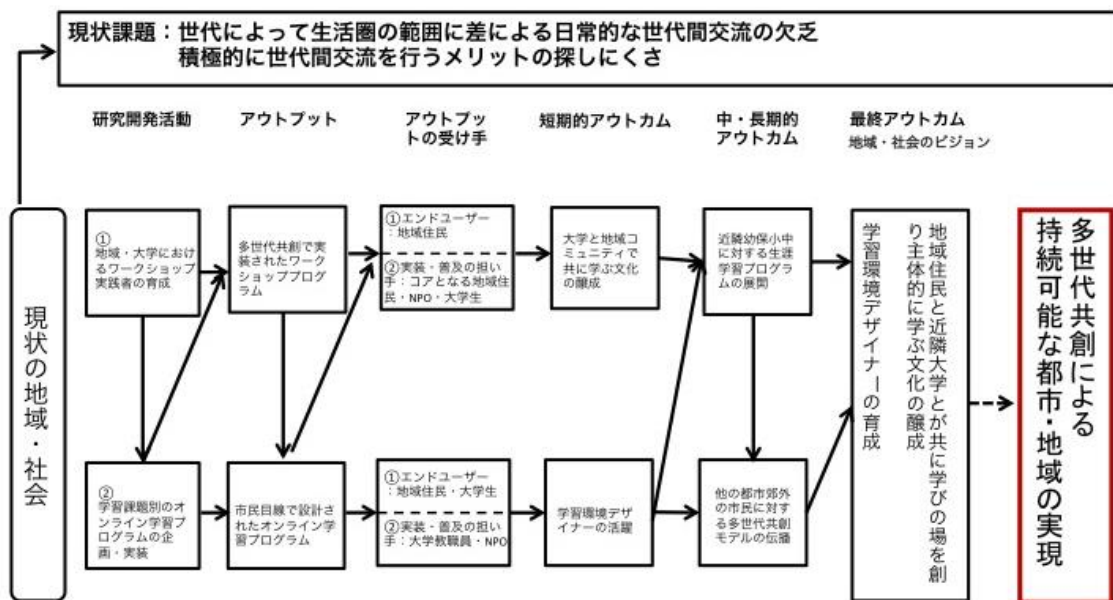


図.10 次年度提案に向けたロジックモデル

3-8. 主なミーティング等の開催状況

年月日	名称	場所	概要
2015年10月13日	フィールドワーク (帝京大学「人間学基礎セミナーII」と共催)	百草ショッピングセンター周辺	すまい方グループのワークショップ実践。司会進行は森、今泉が担当。
2015年10月16日	百草すこやかカフェ	百草団地ふれあいサロン	健康情報グループ1回目のワークショップ実践。テーマは「家庭医」。司会進行は孫が担当。

2015年10月20日	ブックカフェテラチ	帝京大学 八王子キャンパス	全体に共通したワークショップ実践。同タイトルで1回目の開催。テーマは「学生と街、縁結び」。司会進行は山田が担当。
2015年10月21日	みんなでてつがく (帝京大学「教育学II」と共催)	百草団地ふれあいサロン	対話グループ8回目のワークショップ実践。司会進行は井尻が担当。
2015年10月21日	百草まち歩き探検 (帝京大学「教育学II」と共催)	百草団地ふれあいサロン 2階集会室	すまい方グループ1回目のワークショップ実践。司会進行は石川が担当。
2015年11月14日	はじめての演劇	百草団地ふれあいサロン	芸術文化グループ2回目のワークショップ実践。テーマは「雨の日の思い出、短歌をつくる」。司会進行は柏木が担当。
2015年11月18日	みんなでてつがく (帝京大学「教育学II」と共催)	百草団地ふれあいサロン	対話グループ9回目のワークショップ実践。司会進行は井尻が担当。
2015年11月18日	百草まち歩き探検 (帝京大学「教育学II」と共催)	百草団地ふれあいサロン 2階集会室	すまい方グループ2回目のワークショップ実践。司会進行は佐々木が担当。
2015年11月21日	帝京大学ライフロングアカデミー①	帝京大学八王子キャンパス総合博物館	全体に共通したワークショップ実践。同タイトルで1回目の開催。司会進行は森、柏木が担当。
2015年11月23日	ブックカフェテラチ	帝京大学八王子キャンパスソラティオスクエア	全体に共通したワークショップ実践。同タイトルで2回目の開催。テーマは「交流する異文化」。司会進行は山田が担当。
2015年11月25日	帝京大学「教育学II」	帝京大学八王子キャンパス 1131	健康情報グループの大学生向けワークショップ実践。テーマは「メンタルヘルス」。司会進行は孫が担当。
2015年11月28日	帝京大学ライフロングアカデミー②	帝京大学八王子キャンパス総合博物館	全体に共通したワークショップ実践。同タイトルで2回目の開催。司会進行は森、柏木が担当。
2015年12月2日	Educe Cafe	東京大学福武ホール	全体全体に共通したワークショップ実践。司会進行は森が担当。

2015年12月5日	帝京大学ライフロン グアカデミー③	帝京大学八 王子キャン パス総合博 物館	全体に共通したワークショ ップ実践。同タイトルで3 回目の開催。司会進行は森、 柏木が担当。
2015年12月14日	ブックカフェテラチ	帝京大学 八王子キャン パス	全体に共通したワークショ ップ実践。同タイトルで3 回目の開催。テーマは「出 世を誘う、江戸幕府」。司 会進行は山田が担当。
2015年12月16日	ワークショップ 「Sweet Christmas: ツリーの前でお茶会 を」	百草団地ふ れあいサロ ン	帝京大学の学生企画（帝京 大学「教育学II」と共催）
2015年12月16日	ワークショップ「あ の人へのプレゼント」	百草ショッ ピングセン ター2階集 会場	帝京大学の学生企画（帝京 大学「教育学II」と共催）
2015年12月20日	P4Eワークショップ	東京大学 駒場キャン パス	全体に共通したワークショ ップ実践。テーマは「ラー ニングフルエイジング」。 司会進行は森、梶谷が担当。
2015年1月6日	ワークショップ「あ なたの世界、わたしの世 界：あなたに見えてい る世界を教えて」	帝京大学八 王子キャン パス総合博 物館	帝京大学の学生企画（帝京 大学「教育学II」と共催）
2016年1月9日	はじめての演劇	百草団地ふ れあいサロ ン	芸術文化グループ3回目の ワークショップ実践。テー マは「今と昔のお正月」。 司会進行は柏木が担当。
2016年1月14日	教育学II	帝京大学 八王子キャン パス	芸術文化グループのワーク ショップ実践。司会進行は とみやまが担当。
2016年1月23日	第2回百草すこやかカ フェ	百草団地ふ れあいサロ ン	健康情報グループ3回目の ワークショップ実践。テー マは「くすりとの賢いつき あい方」。司会進行は鈴木 が担当。
2016年1月25日	ブックカフェテラチ	帝京大学 八王子キャン パス	全体に共通したワークショ ップ実践。同タイトルで4 回目の開催。テーマは「も のがたりと教訓」。司会進 行は山田が担当。
2016年2月5日	都心から離れて、み らいのすまい方を考え る	百草団地ふ れあいサロ ン	すまい方グループ3回目の ワークショップ実践。テー マは「まどりを考える」。 司会進行は佐々木、今泉が 担当。

2016年2月10日	Edu-Lab Meeting	東京大学 福武ホール	全体に共通したワークショップ実践。テーマは「ワークショップとは何か」。司会進行は森が担当。
2016年2月13日	お話をつくるお茶の会	百草団地ふれあいサロン	芸術文化グループ4回目のワークショップ実践。テーマは「影絵と背景でお話をつくる」。司会進行は久保田が担当。
2016年2月15日	ブックカフェテラチ	百草団地ふれあいサロン	同タイトルで5回目の開催。テーマは「まなびの進化と深化」。
2016年2月16日	第13回ラーニングフルエイジング研究会	東京大学 福武ホール	テーマは「学びあふれる社会のために、芸術文化活動ができること」。司会進行は森が担当。
2016年2月24日	セルフポートレートワークショップ	帝京大学 八王子キャンパス	進行は大西、撮影は栗原が担当。
2016年3月2日	百草すこやかカフェ	百草団地ふれあいサロン	健康情報グループ4回目のワークショップ実践。テーマは「ふれあい共想法ワークショップ：断捨離」。司会進行は大武、永井が担当。
2015年9月25日	コア統括グループ・ミーティング	東京大学 福武ホール	コア統括グループ(森、梶谷、孫、柏木、石川、河田、和泉)による1回目の打ち合わせ。プロジェクト全体の概要やスケジュール等について共有。
2015年10月2日	百草団地ふれあいサロンスタッフ会議	百草団地ふれあいサロン	毎月定例の百草団地ふれあいサロンスタッフ会議に出席。
2015年10月13日	すまい方グループ・ミーティング	帝京大学 八王子キャンパス	すまい方グループによる1回目の打ち合わせ。プロジェクト全体の概要やスケジュール等について共有。
2015年10月16日	芸術文化グループ・ミーティング	新宿	芸術文化グループによる1回目の打ち合わせ。「第2回はじめての演劇」、「ライフロングアカデミー」についての企画詰め。
2015年10月18日	事務局ミーティング	東京大学 福武ホール	事務局での打ち合わせ。今後の役割分担について議論。

2015年11月6日	百草団地ふれあいサ ロンスタッフ会議	百草団地ふ れあいサロ ン	毎月定例の百草団地ふれあ いサロンスタッフ会議に出 席。
2015年11月11日	健康情報グループ・ミ ーティング	本郷三丁目	健康情報グループによる1 回目の打ち合わせ。プロジ ェクト全体の概要やスケジ ュール等について共有。「第 3回百草すこやかカフェ」 について企画詰め。
2015年11月21日	芸術文化グループ・ミ ーティング	帝京大学 八王子キャン パス	芸術文化グループによる2 回目の打ち合わせ。「セル フポートレート・ワークシ ョップ」についての企画詰 め。
2015年12月4日	百草団地ふれあいサ ロンスタッフ会議	百草団地ふ れあいサロ ン	毎月定例の百草団地ふれあ いサロンスタッフ会議に出 席。
2015年12月20日	P4Eワークショップ 「ラーニングフルエ イジング～超高齢社 会における学びの可 能性」	東京大学 駒場キャン パス	本企画調査についての報 告。特に対話グループの活 動を中心に発表。
2015年12月20日	RISTEX領域アドバ イザーとの面談	東京大学 駒場キャン パス	RISTEX領域アドバイザー とスタッフによるサイトビ ジット・面談
2015年12月28日	すまい方グループ・ミ ーティング	新宿	すまい方グループによる2 回目の打ち合わせ。「都心 から離れて、みらいのすま い方を考える」についての 企画詰め。
2016年2月2日	コア統括グループ・ミ ーティング	東京大学 福武ホール	コア統括グループ(森、梶谷、 孫、柏木、佐々木、和泉)に よる2回目の打ち合わせ。 半年間の振り返りと報告書 作成について議論。
2016年2月5日	健康情報グループ・ミ ーティング	百草団地ふ れあいサロ ン	健康情報グループによる2 回目の打ち合わせ。「第4 回百草すこやかカフェ」に ついての企画詰め。
2016年2月22日	事務局ミーティング	新宿	事務局での打ち合わせ。報 告書作成に関する役割分担 について議論。
2016年3月10日	事務局ミーティング		事務局と帝京大学経理グル ープ会計担当との打ち合わ せ。次年度計画に対しての 経理処理方法の相談。

2016年3月10日	ブックカフェテラチ	帝京大学八王子キャンパス	全体に共通したワークショップ実践。同タイトルで6回目の開催。テーマは「継ぐことで創る日本芸能」。
2016年3月16日	第14回ラーニングフルエイジング研究会	京都鍵屋荘	本企画調査についての報告。
2016年3月20日	「ラーニングフルエイジング～超高齢社会における学びの可能性」講演会 「地域社会における多世代交流と教育の役割」	東京大学駒場キャンパス	地域社会における多世代交流と教育の役割について講演とディスカッション。

4. 企画調査の実施体制

4-1. グループ構成

(1) マネジメントグループ

①森玲奈（帝京大学、講師）

②実施項目

役割：体制の検討、ニーズの検討、動向調査（国内外）、実行可能性の検討、まとめ・研究開発プロジェクト提案書作成

概要：対話グループ、医療情報グループ、芸術文化グループ、すまい方グループ、の上位グループとして進捗の管理や調整から報告書の取り纏めまでを行った。研究代表者と各グループリーダー、補助1名からなるマネジメントグループを組織した。

(2) 対話グループ

①梶谷真司（東京大学、准教授）

②実施項目

役割：ニーズの検討、動向調査（国内外）、実行可能性の検討

概要：地域の学習ニーズを探索すること、多世代交流のための信頼関係を構築すること、を目的として位置づけられる。3つの学習課題グループ「健康情報グループ」「芸術文化グループ」「すまい方グループ」より、先行して始められており、上位のグループとして存在するとともに、課題導出や方針決定の際に参照された。

(3) 健康情報グループ

①孫大輔（東京大学、講師）

②実施項目

役割：ニーズの検討、動向調査（国内外）、実行可能性の検討

概要：学習課題グループ「健康情報グループ」「芸術文化グループ」「すまい方グループ」

の1つであり、この3つはプロジェクト企画調査の中では並列である。「対話グループ」の後攻として位置づく。

(4) 芸術文化グループ

① 柏木陽 (NPO演劇百貨店、代表理事)

② 実施項目

役割：ニーズの検討、動向調査（国内外）、実行可能性の検討

概要：学習課題グループ「健康情報グループ」「芸術文化グループ」「すまい方グループ」の1つであり、この3つはプロジェクト企画調査の中では並列である。「対話グループ」の後攻として位置づく。

(5) すまい方グループ

① 石川奈津美 (NPOみらい創造舎、代表理事)

② 実施項目

役割：ニーズの検討、動向調査（国内外）、実行可能性の検討

概要：学習課題グループ「健康情報グループ」「芸術文化グループ」「すまい方グループ」の1つであり、この3つはプロジェクト企画調査の中では並列である。「対話グループ」の後攻として位置づく。

4-2. 企画調査実施者一覧

研究グループ名：マネジメントグループ

氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)	担当する 研究開発実施項目
森 玲奈	モリ レイナ	帝京大学 高等教育開発 センター	講師	統括／調査方針等の決定、領域との 対話・調整・進捗管理
梶谷 真司	カジタニ シンジ	東京大学 大学院総合文 化研究科	准教 授	領域との対話・調整
孫 大輔	ソン ダ イスケ	東京大学 大学院医学系 研究科	講師	グループ間、協力者への連絡・調整
柏木 陽	カシワギ アキラ	NPO演劇百貨 店	代表 理事	領域との対話・調整
石川 奈津美	イシカワ ナツミ	NPOみらい創 造舎	代表 理事	グループ間、協力者への連絡・調整、 報告書取り纏め

研究グループ名：対話グループ

氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)	担当する 研究開発実施項目
梶谷 真司	カジタニ シンジ	東京大学 大学院総合文 化研究科	准教授	統括／ワークショップの設 計・実施・データ分析

研究グループ名：健康情報グループ

氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)	担当する 研究開発実施項目
孫 大輔	ソン ダ イスケ	東京大学 大学院医学系 研究科	講師	統括／ワークショップの設 計・実施・データ分析
大武 美保子	オオタケ ミホコ	千葉大学 大学院工学研 究科人工シス テム科学専攻	准教授	ワークショップの設計・実施 ・データ分析

研究グループ名：芸術文化グループ

氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)	担当する 研究開発実施項目
柏木 陽	カシワギ アキラ	NPO演劇百貨 店	代表理事	統括／ワークショップの設 計・実施・データ分析

研究グループ名：すまい方グループ

氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)	担当する 研究開発実施項目
石川 奈津美	イシカワ ナツミ	NPOみらい創 造舎	代表理事	統括／ワークショップの設 計・実施・データ分析
田口 純子	タグチ ジュンコ	東京大学 先端科学技術 研究センター	特任研究員	ワークショップの設計・実施 ・データ分析

5. 成果の発信等

(1) 口頭発表

①招待、口頭講演 (国内5件、海外0件)

②その他

- ◆ 「<ラーニングフルエイジング>スライド展」を帝京大学総合博物館にて2016年1月5日～1月15日まで開催した。
- ◆ 「<ラーニングフルエイジング>プロジェクト：超高齢社会における学びの可能性」のホームページ (<http://learningful-ageing.jp/>) およびfacebookページ「ラーニングフルエイジング：超高齢社会における学びの可能性」 (<https://www.facebook.com/learningful.aging/>) に、各実践の開催予告並びに開催報告を掲載した。
- ◆ 書籍『ラーニングフルエイジング：超高齢社会における学びの可能性』（森玲奈編著、ミネルヴァ書房より2016年刊行予定）の中で、本企画調査で行った実践を紹介している。